

## 発達障害者のコミュニケーション・スキルの 特性評価に関する研究（その2）

—新版F & T感情識別検査の試行に基づく検討—

（調査研究報告書No.136） サマリー

### 【キーワード】

発達障害 コミュニケーション 特性評価

### 【活用のポイント】

発達障害者のコミュニケーションや対人態度の問題を改善する上で、非言語コミュニケーションの特性を客観的に評価することは重要である。新版F&T感情識別検査では、音声や表情から他者の感情を正しく読み取れているか、さらに曖昧な感情表現からの読み取りに偏りがあるかを評価することで、特性理解や支援計画の立案、職場での配慮事項の検討等への活用が期待できる。

2017年4月

独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構

障害者職業総合センター

NATIONAL INSTITUTE OF VOCATIONAL REHABILITATION

## 1 執筆担当（執筆順）

- 望月 葉子（障害者職業総合センター障害者支援部門 特別研究員）  
武澤 友広（障害者職業総合センター障害者支援部門 研究員）  
向後 礼子（近畿大学教職教育部 准教授）  
知名 青子（障害者職業総合センター障害者支援部門 研究員）

## 2 研究期間

平成 26 年度～平成 28 年度

## 3 報告書の構成

序章 発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価に関する検討課題

第 I 部 新版 F&T 感情識別検査 快 - 不快評定版の基準値の作成と検査特性に関する検討

- 第 1 章 快 - 不快評定版の基準値の作成  
第 2 章 快 - 不快評定版の検査特性に関する検討  
第 3 章 快 - 不快評定版による特性評価の指標

第 II 部 発達障害者の感情認知特性 – 新版 F&T 感情識別検査に基づく検討 –

- 第 1 章 発達障害者の感情語に関する理解、感情の経験頻度及び表情識別の概要  
第 2 章 新版 F&T 感情識別検査 4 感情評定版の結果からみた発達障害者の特性  
第 3 章 新版 F&T 感情識別検査快 - 不快版の結果からみた発達障害者の特性

第 III 部 発達障害者のコミュニケーション・スキルにおける課題と支援

- 第 1 章 対人ストレスに関する検討  
第 2 章 事例から見た発達障害者支援の課題 – ヒアリング調査の結果から –  
第 3 章 結果解釈とフィードバックのために

総括

資料

## 4 背景と目的

発達障害者においては、音声（Tone）や表情（Face）といった非言語的情報から相手の感情を判断することの困難性が指摘されていることから、感情の読み取りに関する特徴の評価からコミュニケーションの支援に役立つ情報を得ることが期待できる。障害者職業総合センターでは非言語的コミュニケーション・スキルの特性評価に関する研究（2014）において、「F&T 感情識別検査 4 感情版」（以下「4 感情版」という。）及び「F&T 感情識別検査拡大版」（以下「拡大版」という。）を用いて発達障害者の特性把握に関する検討を行った。なお、4 感情版は基本的な感情（喜び・悲しみ・怒り・嫌悪）を表現した音声や表情から感情を読み取る際の特徴を評価する検査であり、拡大版は曖昧な感情表現からの感情の読み取りに関する特徴を評価する検査として開発された（障害者職業総合センター，2000，2012）。拡大版を試行した結果、

対象者の年代によって検査得点に違いがある可能性が示唆されたことから、定型発達者の検査データに基づき作成する基準値も年代別に作成すべきかどうかを検討する必要があることが明らかになった。

そこで本研究では、拡大版の基準値に関する検討を行い、検査の基準値を整備するとともに、発達障害者を対象とした検査の試行を通じて、感情の読み取りに関する発達障害者の特徴を明らかにすることを目的とした。これらの検討結果を踏まえて、検査用ソフトウェア「新版 F&T 感情識別検査」（上記「4 感情版」を改修した「4 感情評定版」と上記「拡大版」を再構成した「快 - 不快評定版」から構成）を完成させた。

## 5 新版 F&T 感情識別検査の内容

### (1) 4 感情評定版

- ア 検査刺激：4名の演者（20代、40代の男女各2名）が「喜び」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」のどれかの感情をこめて感情的な意味を含まない言葉を話している音声や表情を用いた。
- イ 呈示条件：①音声のみ条件（音声のみを呈示）、②表情のみ条件（表情のみを呈示）、③音声+表情条件（音声と表情の両方を呈示）の3種類で、①→②→③の順に実施した。全条件を実施した場合の所用時間は約24分であった。
- ウ 回答方法：呈示された音声や表情から読み取れる感情を「うれしい」「かなしい」「おこっている」「いやだなあ」の中から一つ選択させた。

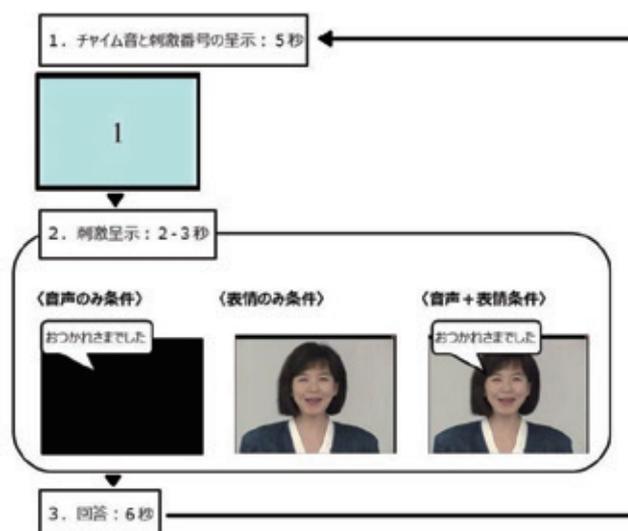


図1 4感情評定版の流れ

### (2) 快 - 不快評定版（検査の流れは回答時間が5秒であること以外は図1と同様）

- ア 検査刺激：先行研究（障害者職業総合センター，2014）で実施した刺激選定調査の結果に基づき、次の①②の条件を満たす刺激を使用した。
- ① 刺激から読み取れる感情を定型発達者10名に回答（複数回答可）させた

結果、特定の感情が50%（音声+表情条件は60%）以下の調査対象者にしか選ばれていないこと。

② 回答に関する確信度（3段階評定）の調査対象者間平均が2以下であること。

イ 呈示条件：4感情評定版と同様の3条件であった。全条件を実施した場合の所用時間は約21分であった。

ウ 回答方法：刺激が表現している快-不快の程度を「-4：非常に不快である～0：快でも不快でもない～+4：非常に快である」の9段階で評価させた。

## 6 方法

(1) 新版F&T感情識別検査快-不快評定版の基準値作成

ア 調査対象：定型発達の成人（在職中もしくは職業経験のある20代から50代の者）319人（男性163人／女性156人）

イ 調査時期：平成26年10月～平成28年8月

ウ 調査内容：

(ア) 新版F&T感情識別検査快-不快評定版

(イ) 質問紙調査：感情語（喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑）に対応する快-不快の程度／調査時点における直近3か月間の感情経験の頻度／感情場面と感情語の対応／表情写真が表現する感情と着目箇所／対人関係におけるストレス 等

エ 実施形式：検査は個別又は小集団で実施／質問紙調査は自記式回答で検査と同日に実施

(2) 新版F&T感情識別検査による発達障害者の特性評価

ア 調査対象：就労支援機関等を利用する発達障害のある成人124人（男性98人／女性26人）

イ 調査時期：平成24年10月～平成28年10月

ウ 調査内容：

(ア) 新版F&T感情識別検査4感情評定版／快-不快評定版

(イ) 質問紙調査：感情語（喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑）に対応する快-不快の程度／調査時点における直近3か月間の感情経験の頻度／感情場面と感情語の対応／表情写真が表現する感情と着目箇所／対人関係におけるストレス 等

エ 実施形式：検査は個別又は小集団で実施／質問紙調査は自記式回答で実施

(3) ヒアリング調査による発達障害者のコミュニケーション支援に関する課題の把握

ア 調査対象：発達障害者21人

イ 調査時期：平成25年8月～平成28年10月

ウ 調査内容：新版F&T感情識別検査、職歴や生活経験、コミュニケーションの課題等

## 7 調査結果から得られた知見

### (1) 新版 F&T 感情識別検査快 - 不快評定版の基準値作成

#### ア 検査刺激の分類

刺激に対する評定値の分析結果に基づき、不快の程度が相対的に高い「高不快刺激（A 検査）」と低い「低不快刺激（B 検査）」に分けて検査得点を算出することとした。

#### イ 検査得点の性差

B 検査の「音声のみ」条件及び「表情のみ」条件を除く全条件で、女性が男性よりも不快に評定していた。

#### ウ 検査得点の年齢区分の差

A 検査の「音声のみ」条件と B 検査の「表情のみ」条件において、男性の 34 歳以下の者が 35 歳以上の者よりも不快に評定していた（図 2）。

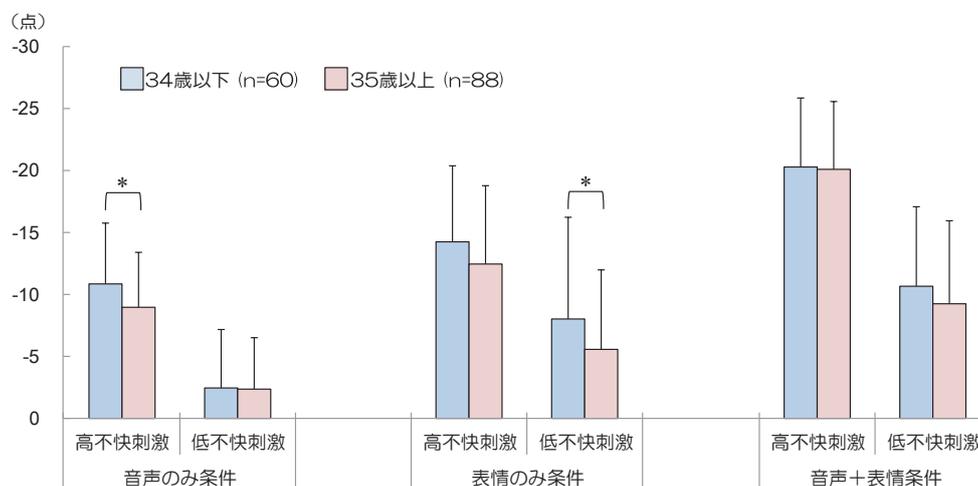


図 2 定型発達者男性の年齢区分別の快 - 不快評定版の得点 (\* $p < .05$ )

#### エ 基準値の作成

上記の結果及び先行研究（障害者職業総合センター，2014）の知見に基づき、快 - 不快評定版の基準値を男性で 3 表（大学生・院生／在職者（34 歳以下）／在職者（35 歳以上））、女性では 2 表（大学生・院生／在職者）を作成した。基準値は「曖昧な感情表現に対して、どの程度、快あるいは不快に偏って感情を読みとるか」を判断するための基準となる。検査結果から「他者感情を読み取る際の偏りの傾向」を評価することができる。

#### オ 快 - 不快評定版の検査特性に関する検討

快 - 不快評定版で評価する「曖昧な感情表現からの感情の読み取りの傾向」と他者の感情認知に関わる他の認知特性や感情の経験頻度との関連を検討した結果、感情語に対する快 - 不快評定とはほとんど関連が認められなかったが、感情の経験頻度とは関連が認められた。具体的には「怒り」や「嫌悪」の経験頻度が高い対象者群は低い対照群よりも B 検査において不快に評定する傾向が認められた。また、快 - 不快評定版の検査得点は対人ストレスとも関連性が認められた。以上のことから、快 - 不快評定版の検査結果を解釈する際には、感情

の経験頻度や対人ストレスに関する情報が重要となることが示された。

## (2) 新版 F&T 感情識別検査による発達障害者の特性評価

### ア 4 感情評定版による特性評価

#### (ア) 正答率

全ての呈示条件について、発達障害者の方が定型発達者よりも正答率が低く、感情の読み取りに困難があることが示唆された。

#### (イ) 混同の傾向

- 「音声のみ」条件では、快感情（不快感情）の表現から不快感情（快感情）を読み取るという「快 - 不快の混同」は定型発達者よりも多い傾向にあった。
- 全ての呈示条件において、「悲しみ」を表現した声や表情から「怒り」や「嫌悪」を読み取る傾向及び「嫌悪」を表現した声や表情から「怒り」を読み取る傾向は定型発達者より顕著に認められた。

#### (ウ) コミュニケーションタイプ

4 感情評定版では、呈示条件別の正答率の傾向から対象者を全 9 種類のタイプのいずれかに分類できる。先行研究（障害者職業総合センター，2012）における知的障害者の検査結果と比較した結果、発達障害者は高受信タイプ、相補タイプが多く、低受信タイプが少ないこと等が明らかになった\*。

### イ 快 - 不快評定版による特性評価

快 - 不快評定版の検査得点（A 検査と B 検査の合計）を定型発達者と発達障害者で比較した結果、「音声のみ」条件において発達障害者が定型発達者よりも不快に評定していたが、「表情のみ」条件と「音声 + 表情」条件では統計的に有意な差は認められなかった（図 3）。

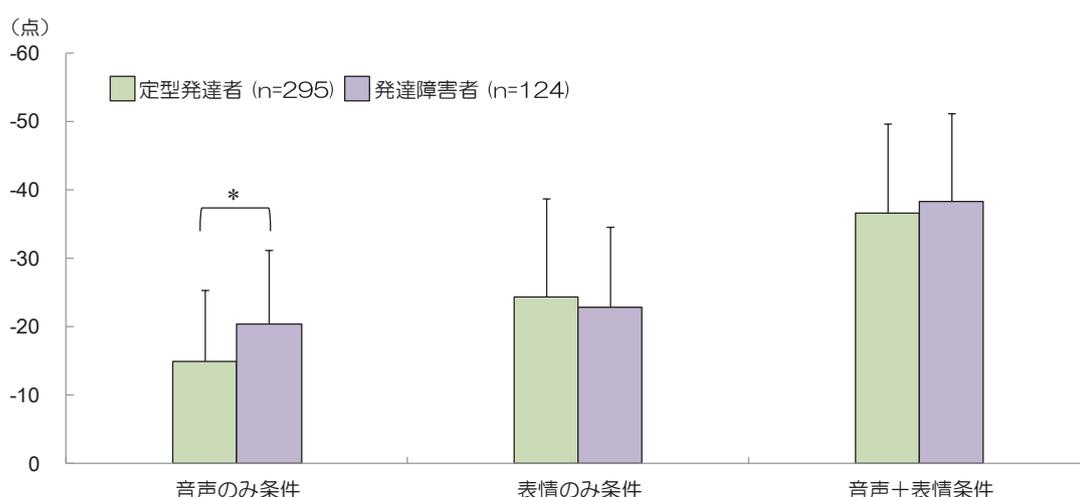


図 3 定型発達者と発達障害者の快 - 不快評定版の得点 (\*  $p < .05$ )

\* 高受信タイプ：全ての呈示条件について正答率が一般基準の 9 割以上  
相補タイプ：「音声のみ」条件や「表情のみ」条件単独では正答率が低い、「音声 + 表情」の正答率が高い  
低受信タイプ：全ての呈示条件について正答率が一般基準の 7 割以下

(3) ヒアリング調査による発達障害者のコミュニケーション支援に関する課題の把握

ア 事例（Xさん）における新版 F&T 感情識別検査の結果解釈

職場での対人面の行動を契機に発達障害の診断に繋がったXさんは、現在休職中である。職業リハビリテーションの専門支援を利用し、プログラムに参加しながら、復職または転職を検討中だが、支援者からは場にそぐわない発言や集団場面での適応の問題が指摘されている。

(ア) 4感情評定版の結果

「表情のみ」と「音声+表情」条件については平均と比較しても十分に高い正答率である（表1）。いずれの条件においても正答率が高いことから、日常的には感情の読み取りに大きな困難はない高受信タイプである。ただし、「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の3感情間の混同は、すべての呈示条件で認められた。

表1 新版 F & T 4感情評定版の結果

		回答された感情				無回答
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	
呈示された感情	喜び	6				2
	悲しみ		8			
	怒り			7	1	
	嫌悪		1		7	
	合計	6	9	7	8	2
正答率 88%						

		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		5		3
	怒り			8	
	嫌悪				8
	合計	8	5	8	11
正答率 91%					

		回答された感情			
		喜び	悲しみ	怒り	嫌悪
呈示された感情	喜び	8			
	悲しみ		8		
	怒り			7	1
	嫌悪			1	7
	合計	8	8	8	8
正答率 94%					

(イ) 快 - 不快評定版の結果

A検査（高不快刺激）、B検査（低不快刺激）のすべての呈示条件で「不快に」偏って読み取っていた。また、この傾向はB検査においてより顕著に表れていた（図4）。

曖昧な感情を受け取る上では、呈示条件にかかわらず相手の感情をより深刻に受け取るという傾向が見られ、4感情評定版の結果による“感情を正しく読み取れていること”とは別に、曖昧な状況に対する不安や、対人ストレス、過去のトラブルの経験等と関係している可能性が示唆された。

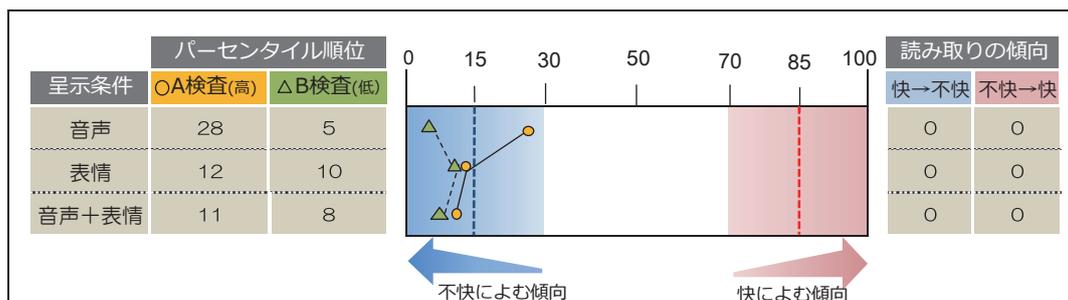


図4 新版 F & T 快 - 不快評定版の結果

#### (ウ) 検査結果の解釈とコミュニケーションの課題の検討

Xさんは、他者感情を正しく識別できるものの、読み取った後の行動については自信が持っていない現状があった。アンケート調査からは“他者との意思疎通”という面のストレスが高く、検査からは他者の感情を必要以上に不快に捉えてしまう傾向も見られたことから、日常生活のコミュニケーションそのものがXさんにとってストレスの高いものとなっていると言える。今後、復職を目指す上では自身のコミュニケーションの方法について課題を整理することで、対人態度の改善可能性を検討していくことが望まれる。

#### イ 事例検討：ヒアリング調査等から得られた知見

- (ア) 検査結果が対象者や支援者の予想していた結果と必ずしも一致しない場合もあることから、客観的な指標を用いて特性を適切に評価することが重要である。
- (イ) 対象者の職業経験やストレス体験等の情報を聴取することは、検査結果の理解に役立つだけでなく、コミュニケーションの課題を整理し、どのように課題解決に取り組んでいくかの手がかりとなる可能性が高い。
- (ウ) 検査結果のフィードバックに併せて表情の注目箇所の確認を行ったところ、事例によっては注目箇所が特定の部分に限定されていたり、読み取る上で必要な箇所へ注目していない等が明らかとなった。注目箇所が明示されれば理解されたが、それにより表情を見ることに前向きになる事例がある一方、対人場面自体に不安を感じる事例もあった。訓練等による表情識別の正答率向上を目指すのか、言葉で確認する補完手段を検討するかは評価結果を踏まえて検討する必要がある。
- (エ) 快・不快評定版における評定の偏りの背景として「ストレス」の現れ方を検討する上で、職歴の有無等による経験の違いを考慮する必要性が示唆された。
- (オ) 職業経験があっても職場で期待される行動や役割の理解が必ず促進されるわけではない事例からは、発達障害者における職場での「一般的な研修」や「自己研鑽」等によるスキルの獲得可能性について、事前に十分検討することの必要があることが示唆された。一方、職業経歴が比較的長く、一定期間職場に適応していた事例では、本人が適応可能な環境であれば、期待される行動や役割理解の獲得可能性が高まることが示唆された。

## 8 関連する研究成果物

障害者職業総合センター（2000）調査研究報告書No.39 知的障害者の非言語的コミュニケーションスキルに関する研究……F&T 感情識別検査の開発……

障害者職業総合センター（2012）F&T 感情識別検査－4感情版－（ソフトウェアインストールDVD）

障害者職業総合センター（2014）調査研究報告書No.119 発達障害者のコミュニケーションスキルの特性評価に関する研究……F&T 感情識別検査拡大版の開発と試行に基づく検討……